

離魂記

陳玄祐撰

あらすじ

清河の張鎰の娘倩娘は、従兄の王宙と恋仲だった。張鎰はそれを知らず、他の男と婚約させる。恨み悲しんだ王宙は任官を求めて都に赴く。夜半、家出した倩娘が王宙の船に辿り着く。二人は蜀に逃れて五年、子供にも恵まれた。望郷の思いに駆られて、二人は帰郷する。王宙が一人先に謝りに行くと、父は驚き、倩娘は病氣でずっと部屋に臥せつたままだったという。寝ていた娘は倩娘が帰宅したと聞くと喜んで立ち上がり、そこへ帰つて来た倩娘と合体した。

解説

五八神魂一の当該作最後の段落冒頭に「事出『陳玄祐離魂記』云」（これに続く本文は「玄祐少常聞此説……」）の九字が見えるからである。但し、本書底本の魯迅『唐宋传奇集』はそれを衍字として削っているので、ここには載せていない。

陳玄祐については、本文中にある代宗の大曆年間（七六六—七七九）の人としかわからない。

中国における魂魄への関心は古く、『儀礼』『士喪礼』に、死者の魂を招き返す招魂の風俗儀式が記されている。また南方文学の祖『楚辭』には「招魂」という作があり、「魂兮帰來（魂よ帰り来たれ）」と身から離

脱してさまよう生魂に呼びかけて、脅したりすかしたりして帰るよう説得している。現代でいう神経症などの症状を、魂が肉体を離脱した状況と解したのであろう。

六朝志怪にも少なからず魂魄をめぐる話が認められるが、「離魂記」に最も類似するのは、龐阿という若者に恋した石氏の娘の話（劉宋、劉義慶撰『幽明錄』所収）である。阿の家に石氏の娘が突然出現する。阿の妻は嫉妬し、娘を縛り上げて、石家に送り返す。応待に出た父親は、たった今奥で母親と家事をしている娘の姿を見たばかりなので、驚愕する。すると縛られていた娘はすっと消えてしまった。母親が娘を問い合わせると、娘は阿への想いを打ち明けた。数年後、阿の妻が病死したので、阿は石氏の娘を妻にしたというハッピーエンドである。ここには、肉体と魂の合体場面は無いが、激しく一途な恋心（心魂）が、愛する人を求める、肉体から離脱して恋人の下へ出現するという「離魂記」の最も主要なモチーフを認めることができる。阿の日常生活の中（書齋）に、突然見知らぬ若い女性が出現することの衝撃性は「離魂記」には無いが、船底に横たわる王宙の耳に、次第に近づいてくる倩娘の裸足の足音の効果など、志怪には無い小説的手法が工夫されているといえよう。



天授三年（六九二）、清河（河北省）の張鎰は、役人として赴任して衡州（湖南省衡陽県）

に住んでいた。性格は飾り気なくもの静かで、友人も少なかった。息子はおらず、娘が二人いたが、長女は早く亡くなつた。残された次女倩娘は容貌、ふるまいともに類まれな美しさだった。鎰の甥、太原（山西省）の王宙は幼い頃から聰明で、姿形もすぐれていた。鎰はいつも王宙の才器を高く買ひ、普段から「将来、倩娘を嫁にやろう」と言つていた。

その後二人はそれぞれ成長し、人知れず寝てもさめてもいつも恋い慕う仲になつたが、家族はその事情を知らなかつた。そうこうするうち、幕客の中で官吏に選ばれた者が求婚し、鎰は婚約を許した。娘はそれを聞いてふさぎ込んでしまつた。王宙も心底怒り恨み、求職にかこつけて上京を願つた。引き止めたがきかないでの、そのまま手厚く送り出した。王宙は心中激しく恨み悲しんだが、断ち切るよう別れて船に乗つた。

原文

天授三年、清河張鎰、因_レ官家_ニ于衡州。性簡靜、寡_ニ知友。無_レ子、有_ニ女二人。其長早亡、幼女倩娘、端妍絕倫。鎰外甥太原王宙、幼聰悟、美_ニ容範。鎰常器重、每曰、他時當下以_ニ倩娘_ニ妻_レ之。後各長成、宙与_ニ倩娘_ニ常私感_ニ想於寤寐、家人莫_レ知_ニ其状。後有_ニ賓寮之選者、求_レ之。鎰許焉。女聞而鬱抑。宙亦深恚恨、託以_ニ當調_ニ請_レ赴_レ京。止_レ之不_レ可。遂厚遣_レ之。宙陰恨悲慟、決別上_レ船。

語注

○端妍_ニ端正で見目麗わしいこと。

○器重_ニ才知と器量を高く評価して重んじること。

○感想_ニ心に深

書き下し文

天授三年、清河の張鎰は、官に因りて衡州に家す。性は簡靜にして、知友寡し。子無く、女二人有り。其の長は早に亡くなり、幼女倩娘は、端妍絶倫なり。鎰の外甥太原の王宙は、幼きより聰悟、容範美し。鎰は常に器重し、毎に曰はく、他時當に倩娘を以て之に妻はすべし、と。後に各々長成し、宙と倩娘とは常に私に寤寐に感想し、家人は其の状を知る莫し。後に賓寮の選せられし者有り、之を求む。鎰は許す。女は聞きて鬱抑す。宙も亦た深く恚恨し、託するに當調を以てし、京に赴かんことを請ふ。之を止むれども可かず。遂に厚くして之を遣る。宙は陰かに恨み悲慟し、決別して船上に上る。

現代語訳

2

日が暮れて、二~三里離れた山すその村に着いた。真夜中になつても、宙は眠れない。すると誰か一人、岸辺をひた走る足音が耳に入り、たちまち船の所までやつて來た。誰かと聞くと、なんと倩娘が裸足で歩いて來たのだつた。宙は氣も狂わんばかりに大喜びし、その手を取つて事の次第を尋ねた。倩娘は泣きながら言つた。「あなたがここまで私を思つてくださり、私も夢にまであなたを思つていました。それなのにすんでのところで私のこの気持ちが無理矢理押しつぶされそうになりました。それにあなたの深いお気持ちが、変らないと知つたからには、命がけでお報いしたいと思つて生きていけますやら」と言う。宙は哀れに思つて言つた。「帰ることにしよう。もう苦しむことはない。」そこで一人はそろつて衡州に帰つた。

それから五年、二人の息子にも恵まれたが、父の鎰とは音信不通のままだつた。妻はいつも父母を思つては涙を流し、「私はあの時、あなたを裏切ることができず、親孝行を棄ててあなたの元に走りました。これまでの五年、両親との恩愛は阻まれたままです。天地の恵みを受けながら、一体どんな顔をして生きていけますやら」と言う。宙は哀れに思つて言つた。「帰ることにしよう。もう苦しむことはない。」そこで二人はそろつて衡州に帰つた。